

祖父への卒業証書

二〇〇九年三月三十一日、

祖父が尼崎を卒業した日である。

祖母を亡くし、体の不自由な祖父一人では大変だろうと、私が四才の時から六年間一緒に暮らしていた。

毎日一緒にゲームをして遊んだり、私が怒られるとוגさめてくれる優しい祖父

が大好きだった。私の心の拠り所だった。

ところが二年を過ぎた頃から認知症の症状が出始めた。初めはただの物忘れだと思っていた。しかし、食事をしたことや、私たちの名前までわからなくなってしまった。トイレの失敗も頻繁に起こるようになり、下の世話が必要になった。被害妄想も増え、物が無くなると母を疑うこともあった。一番世話をしている母が可愛そうだった。

認知症はテレビで見たこともあり、なんとなく分かっていたつもりだった。だけど、実際に目の当たりにし、大変さを初めて知った。介護する側とされる側の辛さも身をもって知ることができた。



認知症がかなり進んだ頃、母が少し出かけた時のことだった。祖父が困った顔をしていたので、

「どうしたん？」

と聞くと、

「いや…。」

と言いくそうだった。トイレに間に合わなかったのだ。私は戸惑ったが、母の見よう見まねで、シャワーを使いきれいに体を洗った。

「じいじ、心配せんでいいで。大丈夫やで。」

と言うと、

「すまん、こんなことまでさせてしまった。」

と泣いていた。私は不思議と汚いとか臭いとか感じなかった。ただ、祖父が気持ち悪いだろうと思ったのと、母の仕事を少しでも減らしたいと思ったからだ。その時思った。母の大変さと祖父の辛さを。

「あなたにまでこんなことをさせてしまった。ごめん。ありがとう。」

と、母は何回も言った。

その後、祖父の症状は更に進み、母が体調を崩し、祖父は神戸の施設で生活することになった。祖父は行きたくなかったに違いない。

「最期はここがいい。」

前に話を聞いたことがあった。私はこの家から祖父が居なくなるなんて考えられなかった。でも小学生の私にはどうすることも出来なかった。悲しかった。母も辛かったようだ。

入所する前日、家族全員が泣いた。祖父は、「今まで楽しかったよ。ありがとう。明日からは友達もいるし不安はない。大丈夫。」

と笑顔で話した。一番辛いのは祖父なのに。私と弟は精一杯頑張って、祖父に卒業証書を贈った。その日が二〇〇九年三月三十一日である。決して忘れることのない日である。

しばらくして、祖父に会いに行った。もともと社交的な祖父は、たくさんの友達ができ、楽しそうに話をしていた。私は心からホッとした。母は、

「名前や顔がわからなくても、じいじが毎日楽しければそれだけで嬉しい。」

と言った。私もそう思った。祖父が、今日の暮らしのなかで、楽しさやうれしさを感じてくれる時間が少しでも多くあれば、私もうれしい。記憶が少なくなっていくとしたとしても、私たち家族が祖父との思い出を覚えていけば、祖父の記憶の支えにもなるし、祖父ががんばって生きた証になると思う。



そんななかで、時々祖父の記憶が戻る時間があった。私は、祖父を喜ばせようと、学校でがんばっていることを一生懸命話した。でも、祖父はきまってる、

「すごいな。でもそんなにがんばらんでいいんやで。元気でいてくれたらそれでいい。」

と言ってくれた。

二年後、祖父は体調を崩し、天国へと旅立った。とても穏やかな顔だった。身近な人の「死」というものがこんなにも辛いものとは思わなかった。

人は誰でもいつかは老いる。年をとれば今まで出来ていたことが出来なくなったり、忘れてしまうのは仕方のないことである。決して恥ずべきことではないし、誰にでも訪れる現実だと思う。本人にとって辛いことであつたり、周りの人にとっては寂しいことかもしれないけれど、家族に愛情を注ぎ、社会に貢献してくれたお年寄りに感謝したいし、お年寄りからいろんなパワーももらいたいと思う。介護される側、介護する側、どちらにも思いがある。難しいかもしれないけれど、できるだけ相手の話を丁寧に聞き、気持ちを理解し、自分の気持ちも伝えようとするのが大切だと思う。

「じいじ、これからも私たちのことを遠くから見守ってね。ありがとう。ずっと忘れないよ。」